統括文の位置と文間の関係の強さ

馬場　俊臣

1．はじめに

「統括文の位置」による文章構造は，主題の位置による文章構造の分類である「頭括式・尾括式・双括式」などと呼ばれることもある。本稿では，このような文章構造の分類を，永野（1986）に従い，「統括(文)」の位置の違いによる文章構造の相違と捉え，以下，永野の呼称に従い，「冒頭統括・末尾統括・中間統括・冒頭末尾統括・零記号統括」（p.316）と呼ぶことにする。

永野・市川（1979）では，「統括」を，次のように説明している。

> 「統括」とは，なんらかの意味で，文章の内容を支配し，または，文章の内容に関与することによって，文章全体をくくりまとめる機能を言う。

このような「統括」機能を担う文(本稿では，「文」に限定して考えていく[注1])が存在すること，そして，それが文章中のどの位置に置かれるかは，文章の構造分析のためだけでなく，広く実践的な文章の読解や表現においても重要であることはいうまでもなかろう。

これまで，この「統括」の問題は，どのような表現内容の時に「統括」機能があると考えるか，あるいは，どのような特徴を持つ言語形式の場合に「統括」機能があると認められるかなどという観点からの考察が主になされてきた（市川 1978，永野 1986，佐久間 1987 など）。

本稿では，この「統括」の問題を，「文と文との結び付きの強さ」また「文章全体のまとまりの強さ」という文章構造における文間相互の関係付けの強さ[注2]の側面から取り上げ，調査の結果に基づき，特に次の二点に関して考察していく。

(A)まず第一点は，ある文章が言語使用者に読まれ，その内容が読み手の中で，ある整合性のあるまとまり（テクスト世界[注3])へと構造化される時に，その文章中で意味上形態上の特異性がある「統括」機能を持つ文（以下「統括文」）が他の文すなわちその「統括」機能を受ける文（以下「被統括文」）に比べ，文間相互の関係付けの強さの上でも何等かの特別な振舞いをするか，つまり優位性を持つかという点である。ここで

「何等かの特別な振舞い」「優位性」という表現を用いたが，本稿では，これを上述のように文間相互の関係付けの強さの観点から，統括文が，その被統括文と相対的に強い結び付きを持つかどうかという点で捉えていくことにする。したがって，この考察のために行う調査は，文章中の文と文との結び付きの強さを判断評定してもらう調査（以下「結び付き調査」）である。さらに，この結び付きの強さから見た各文章構造に関するいくつかの特徴を指摘していく。

（B）第二点は，文章中における統括文の位置の違いと文章全体の「まとまり」の強さとの関係である。文章の評価の一つとして「よくまとまっている」等の表現がなされるが，文章全体の「まとまり」という概念は，あいまいな概念である。ここでは，一応，文章中のすべての文相互の間に存在する「統一性」の強さとして捉えておく。ただし，「まとまり」の強さの判断は，実際には，後述の調査の被調査者の直観的判断に基づいている。さて，「統括」機能が文章の「統一性」に関わる機能であるならば，その「統括」機能を持つ統括文の文章中における位置の違いが，この「統一性」の強さ（まとまりの強さ）に影響を及ぼすことが予想されるが，この点を確かめるのが，第二点の目的である。この考察のために行う調査は，文章全体のまとまりの強さを直接判断評定してもらう調査（以下「まとまり調査」）である。

以下，２章で上記（A）の問題，３章で上記（B）の問題をそれぞれ考察していく。

２．統括文の位置と文間の結び付きの強さ

２．１．「結び付き調査」の方法

１．で述べた（A）の分析のために，以下のような調査を行った。この調査は，馬場（1986b）の「文の相互関連度」調査の方法と同じものである。

調査の手順は，まず，被調査者[注4]に特定の文章を調査用紙に記して提示し，その文章中のすべての文を二文ずつ対にして示した「二文の対」のそれぞれに対して，「結び付きの強さの程度」を，七段階の尺度の上に評定してもらうというものである。この調査用紙の一部を《付録１》に載せておく。また，調査分析に用いた文章例は，統括文の位置の違いによる「冒頭統括・末尾統括・中間統括・冒頭末尾統括・零記号統括」の５種の文章構造を持つもので，それぞれの文章構造について，2種（「零記号統括」は時間的配列

方式･空間的配列方式のものを各2種）の異なった内容の文章例を作った(この2種を以下「冒頭Ａ・冒頭Ｂ」のように呼んで区別する）。これらの文章例はいずれも短い４文構成の文章例であるが，これは，実際の文章の最小限のモデルとして考えようとしたためである。これらの文章例の一部を，《付録２》に載せておく。

この調査の結果は，次の方法で分析した。文章例ごと・被験者ごとに，文の結び付きの関係を示した図（以下「構造再現図」）を描く[注5]。この図は,評定値に基づき，高い評定値となった文同士を順につなげていって，どの文とどの文とが強く結び付きあいながら，最終的にすべての文が結びつくかを示したものである。こうした図を被験者ごとにつくり，同一の型の図で人数が相対的に多いものを考察の対象として取り上げる。

２．２．分析結果 ― 各文章例の構造再現図と統括文の優位性

次頁の〈図１〉～〈図12〉は，各文章例の評定値から再現した構造再現図のうち，相対的に人数の多いものである。この〈図１〉～〈図12〉の構造再現図に現れた，統括文と被統括文との間の結び付きの強さの特徴から,統括文の優位性というものを見ていく。

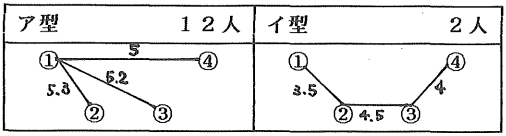
まず，冒頭統括の「冒頭Ａ」では，統括文①（以下①～④は文番号を表す）が，被統括文②③④のそれぞれと直接に強い結び付きの強さでつながっている［注6]ア型が多くなった。「冒頭Ｂ」についても同じである。

末尾統括の「末尾Ａ」では，被統括文①②③の３文が相互に強く結び付き,さらに,統括文④が①②③の３文のそれぞれとやや弱い結び付きの強さでつながっているア型がある。その一方，①②③の３文が，それぞれ，統括文④と直接強い結び付きの強さでつながるイ型も現れている。「末尾Ｂ」も,「末尾Ａ」と同様に,同じア型・イ型が現れている。ただし，「末尾Ｂ」では，①の文から順次後続する文に対して結び付くウ型もあるが，この型は「末尾Ａ」では１人しかいないので，末尾統括の代表的な構造再現図としては取り上げないことにする。

中間統括の「中間Ａ」では，統括文③が，被統括文①②④の３文とそれぞれ直接強い結び付きの強さでつながるア型が代表的であると考えられる。また,「中間Ｂ」でも，「中間Ａ」の場合と同じア型（この場合は②の文が統括文）が代表的である。

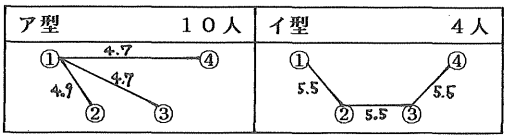
冒頭末尾統括の「冒頭末尾Ａ」では，統括文①④の２文がそれぞれ，被統括文②③と直接結び付くア型が多い。ただし，この「冒頭末尾Ａ」では，①対②③の結び付きの強さの方が，②③対④の結び付きの強さよりも相対的に強くなっている。「冒頭末尾Ｂ」

〈図１〉　「冒頭Ａ」の構造再現図



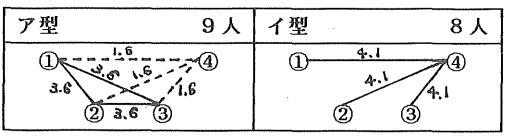
残り６名は各々別々の図。
１名無記入。

〈図２〉　「冒頭Ｂ」の構造再現図



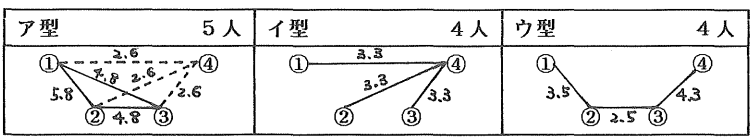
他は２名での共通が１種。
残り３名は各々別々の図。

〈図３〉　「末尾Ａ」の構造再現図



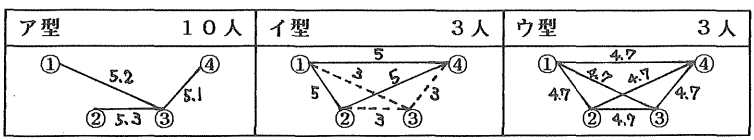
残り４名は各々別々の図。

〈図４〉　「末尾Ｂ」の構造再現図



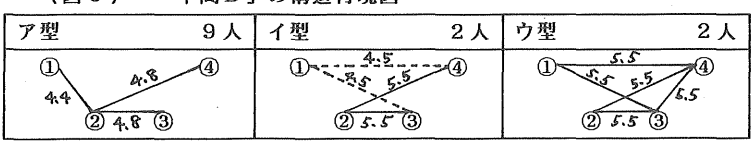
他は，２名での共通が１種。残り４名は各々別々の図。

〈図５〉　「中間Ａ」の構造再現図



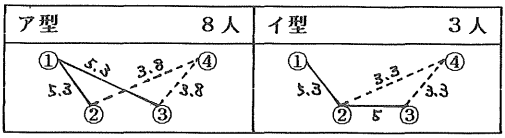
他は，２名での共通が２種。残り１２名は各々別々の図。

〈図６〉　「中間Ｂ」の構造再現図



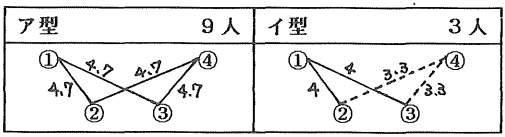
残り１７名は各々別々の図。

〈図７〉　「冒頭末尾Ａ」の構造再現図



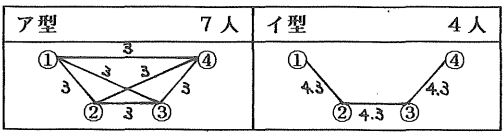
他は２名での共通が４種。
残り13名は各々別々の図。

〈図８〉　「冒頭末尾Ｂ」の構造再現図



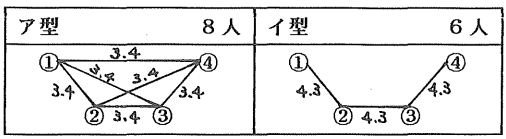
他は２名での共通が５種。
残り８名は各々別々の図。

〈図９〉　「時間Ａ」の構造再現図



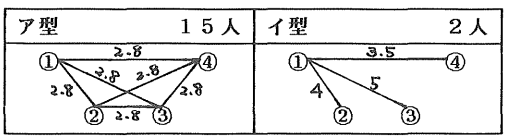
他は２名での共通が２種。
残り６名は各々別々の図。

〈図10〉　「時間Ｂ」の構造再現図



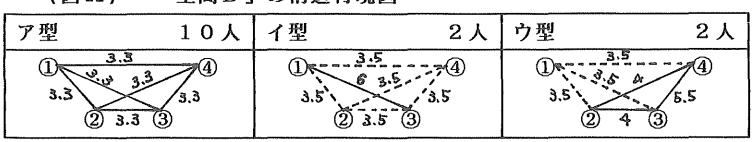
残り５名は各々別々の図。

〈図11〉　「空間Ａ」の構造再現図



残り４名は各々別々の図。

〈図12〉　「空間Ｂ」の構造再現図



他は２名での共通が１種（①-②-③-④の型）。残り３名は各々別々の図。

では，「冒頭末尾Ａ」のア型と同じイ型が出てきているが，この型となったのは３名で，ア型の方が人数が多い。ア型は，統括文①④の２文がそれぞれ，被統括文②③と直接に，同じ強さの強い結び付きの強さでつながっている型である。以上のことから，冒頭末尾統括の代表的な構造再現図は，「冒頭末尾Ａ・Ｂ」のア型であると考えることにする。

零記号統括である「時間Ａ」「時間Ｂ」では，４つの文が相互にそれぞれ同じ結び付きの強さでつながっているア型が代表的である。ただし，①の文から順次後続する文に対しやや強い結び付きの強さでつながっていくイ型にも注意しておく必要があろう。「空間Ａ」「空間Ｂ」では，４つの文が相互にそれぞれ同じ結び付きの強さでつながっているア型を代表的な型と見てよいであろう。

さて，以上，統括文の位置別にその特徴を見てきたが，ここで，結び付きの強さの観点から見た統括文の優位性に関してまとめると，次のようになろう。

(1)統括文と被統括文との結び付きの強さは，相対的に高い値（4前後ないしはそれ以上）となり，構造再現図ではこの両者がまず第一につながる場合が多かった(「末尾Ａ・Ｂ」のア型は除く。後述）。

(2)一方，統括・被統括の関係にない文同士の結び付きの強さは，相対的に，上記(1)の場合比べ，やや弱い値となっていた（こういう文同士のつながりは，ここでの文章例の場合，並列の関係でつながっているものである）。

このように，「文と文との結び付きの強さ」という観点からみた場合，統括文はその他の文に比べ，特徴的な結び付き方をしていると考えられる。すなわち，統括文は被統括文に対し，意味上形態上の特異性があるというこれまでの見方に加えて，（意味上形態上の特異性ゆえに）文相互の結び付きの強さという点でも，独自の地位を占め，優位性があるということをここで確かめえたのではなかろうか。

２．３．文章構造別の特徴

次に，得られた構造再現図から指摘できる各文章構造の特徴について見ていく。

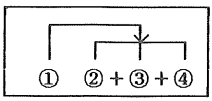
２．３．１．冒頭統括

冒頭統括の文章例の構造再現図の代表的な型は，〈図1〉〈図2〉のア型と考えた。

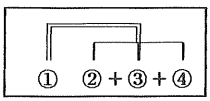
この冒頭統括の文章例の構造を，永野（1986）の「文の連接関係」に基づいて図示すると，次頁の〈図13〉〈図14〉のようになろう。

①の文が「展開型」ないしは「同格型」で，②③④の３文に「積石型」の形で連接し，

〈図13〉冒頭A



〈図14〉冒頭B



（注）
→：展開型
＋：累加型
＝：同格型
凸：積石型

さらに，②と③の文，また，③と④の文がそれぞれ「累加型」で連接すると分析できる。

構造再現図では，②と③と④の文の間のつながりは示されていないが，これは，構造再現図の作り方の問題で，もし，弱い結び付きのものも加えて図示するならば，②③④の３文がそれぞれ相互に弱い結び付きの強さでつながることになる[注7]。

調査から得られた構造再現図と，文の連接関係を基にした構造の図示との間には，細かい点で違いがあるが，この違いから，次の２点が指摘できる。

まず，文の連接関係では，①と②③④との「展開型」(「同格型」)と，②③および③④との「累加型」とは，どちらの方が強い結び付きになるのかという点に関して，何も表示されていない。しかし，構造再現図では，「展開型」(「同格型」)の方が，「累加型」よりも相対的に強い結び付きの強さになっていた。すなわち，調査で用いたような冒頭統括の文章例では，①の文が残りの３文と「展開型」(「同格型」)で強くつながり，②③④の３文が(「累加型」で)やや弱い結び付きの強さでつながりを持つというような相対的な結び付きの強さを示すことができる[注8]。

また，連接関係の図示では，②の文と④の文とのつながりは，直接的には，明示されていないが，結び付きの強さの観点からすると，②③また③④と同じ強さで②④がつながることが多かった[注7]。このことは，この調査の主な要因となる「テクスト世界」での構造を考えた場合，②の文と④の文との間も「累加型」という関係が成り立っていることを示唆している。確かに，「表層テクスト」レベルの文の配列順序に従えば，②と③,そして,③と④という線条的なつながりとなるのであるが，「テクスト世界」のレベルで考えるならば，②と③，また，③と④，さらに，②と④の３つの組合せを「累加型」として押さえる必要があることを，構造再現図は示唆していると思われる。

なお，以上と同様の指摘は他の文章構造の場合にもそれぞれ考えられるであろう。

２．３．２．末尾統括と冒頭末尾統括

末尾統括を，冒頭統括と比較した場合，単純に考えるならば，統括文の位置が，文章

の末尾にあるか冒頭にあるかの違いだけのように思われる。調査結果からの構造再現図では，単にこの違いだけでは説明できない違いが現れた。すなわち，「冒頭Ａ・Ｂ」のア型と「末尾Ａ・Ｂ」のイ型とは，正に，統括文の位置が正反対の図であったが，「末尾Ａ・Ｂ」のア型は，冒頭統括と対応させることは出来ない。ここでは，まず，このア型について考えていくことにする。

「末尾Ａ」「末尾Ｂ」の構造再現図のア型の結び付きの強さの平均値を見ると，①②③の文相互の結び付きの強さは，「末尾Ａ」では 3.6 ，「末尾Ｂ」では 4.8(5.8) で，強い結び付きの強さとなっている。それに対して，①④，②④，③④の結び付きの強さは，「末尾Ａ」では 1.6 ，「末尾Ｂ」では 2.6 で，弱い結び付きの強さとなっている。ここで挙げた平均値は，あくまでも相対的な値であるが，④の文がこれまで見てきたような統括機能を持つと解釈するには，低すぎる値であるように思われる。これは，どのように考えたらよいのであろうか。

まず，「末尾Ａ」「末尾Ｂ」のような「末尾統括」の場合には，二通りの構造に解釈しうる可能性があると考えられないであろうか。そして，その二通りの構造のうちの，一つ(構造再現図のイ型の場合)は，（結び付きの強さの点から）明確に末尾の文が統括機能を果していると考えてよいであろう。それに対し，もう一つの構造（ア型の場合）はどうであろうか。末尾の④の文が，直前の③の文だけでなく，①②③の３文のそれぞれと，相対的に弱い結び付きの強さながらも，つながっていることを考えると,やはり，この④の文は，①②③の文を言わば「弱く」統括していると考えてもよいのではなかろうか。すなわち，「統括」機能の強さにも程度があり，末尾統括の場合は，「弱い」統括機能の場合も考えられるのではないかということである。

ところで，このようなことは，冒頭末尾統括の文章例の末尾の統括文に関してはどうであろうか。「冒頭末尾Ａ」のア型，「冒頭末尾Ｂ」のイ型の各構造再現図を見ると，末尾の④の文と②③のそれぞれの文との結び付きの強さは，冒頭の①の文と②③のそれぞれの文との結び付きの強さよりも，低い値になっている。すなわち，冒頭末尾統括の場合も，末尾の統括文はやや「弱く」統括することがあると考えることができよう。

以上の指摘は，文章の冒頭に統括文がある方が，その統括機能を強く発揮しやすいことを示していると考えることができるのではなかろうか。逆に言えば，文章の末尾に統括文があると，その統括文は，言わば単なる付け足しとしてのまとめの文と解釈されることもありうると言えよう。ここでは，このような文を，「弱い」統括としたが,果して

同じ「統括」という名称を使用すべきか否かはさらに考えてみる必要がある。

２．３．３．零記号統括

零記号統括の文章例とした「時間Ａ・Ｂ」「空間Ａ・Ｂ」の構造再現図で，①から④の４文が相互に同じ結び付きの強さでつながるア型は，４つの文章例に共通して現れている。これは統括文が顕在しないために，４つの文が同じ資格で文章を構成しているためと考えられる。この場合,仮に統括文が顕在したとすれば,これらの４つの（被統括）文は,それぞれ,その顕在した統括文と直接強い結び付きの強さでつながると予想される。

ところで，「時間Ａ・Ｂ」のイ型は，①の文から順次後続する文と強い結び付きの強さでつながる型であるが，このイ型となった被調査者の数は，ア型に比べ，やや少ないながらも，「時間Ａ」「時間Ｂ」の２つの文章例に共通して現れてきている。これは，どのように考えればよいのであろうか。

まず，「時間Ａ・Ｂ」のような文章例の場合も，可能性として２通りの構造として解釈しうると考えてみることにする。一つは上記のア型，一つはイ型の各構造である。

このイ型の場合，ア型と同じく「零記号統括」と考えられるが，４つの文が全く「同じ資格」で文章を構成しているとは考えられない。すなわち，題材の面での順序が「テクスト世界」での構造に深く関与してきており，その順序が結び付きの強さの値に反映してきていると思われる。では，このイ型の場合，仮に統括文が顕在したとすれば，どうなるであろうか。これは難しい問題であるが，４つの（被統括）文が，その顕在した統括文とそれぞれ強い結び付きの強さでつながることはないであろうと予想される。

３．統括文の位置と文章全体のまとまり

３．１．「まとまり調査」の方法

本章では，１．で述べた（Ｂ）の問題すなわち文章中における統括文の位置の違いと文章全体のまとまりの強さとの関連について，調査結果に基づいて考察していく。

１．で既に述べたように，ここでの「文章全体のまとまり」の強さは被調査者の判断評定の結果に基づくものであるが，この強さの判断評定に影響する要因として，次の４つを想定してみる。

a)文章中における統括文の位置　　b)文章の内容

c)文章全体の長さ　　d)文章中の各２文間の結び付きの強さの程度

そこで，ここでの「まとまり調査」に用いる文章例は，c）の要因を除くために，４文構成のほぼ同じ長さの文章例とし，さらに，a)b）の２要因がどのように関与するかを見るために，５つの異なった文章構造（統括文の位置）と４つの異なった内容とを組み合わせて，計20の文章例を用いた。また，d）の要因との関連を見るために，同じ20の文章例のそれぞれに対し，「結び付き調査」も併せて行った。

「まとまり調査」の調査手順は，まず，被調査者[注9]に特定の文章例を調査用紙に記して提示し，それぞれの文章例についてその「まとまりの強さ」を７段階の尺度の上に評定してもらうというものである。この調査用紙の一部を《付録３》に載せておく。調査分析に用いた文章例は，上述の通り，５つの異なった文章構造と４つの異なった内容を組み合わせて作った合計20の文章例である。文章構造の違いは統括文の位置の違いによる「冒頭統括・末尾統括・中間統括・冒頭末尾統括・零記号統括」の５つであり，内容の違いは「子供の名前の記述・娘の得意な楽器の記述・世界中のいろいろなあいさつの記述・自分の趣味の記述」の４種の内容である。《付録４》にその一部をあげておくが，これは「娘の得意な楽器の記述」の内容の５種の文章例である。

得られた評定値の分析は，統括文の位置の差と内容の差との２要因の分散分析を行い，「まとまりの強さ」の判断評定に，統括文の位置の差の要因と内容の差の要因のどちらが（強く）影響するかを見た。

また，この同じ20の文章例についての「結び付き調査」の手順は，２．で述べた手順と同じである。この調査で得られた結果の分析は，各文章例ごとに，計６組の２文対の評定値の平均値を求めて，「まとまり調査」の結果と比較することにした。

３．２．分析結果 ― 文章全体のまとまりの強さの判断の要因

まず，統括文の位置の差の要因と内容の差の要因との２要因の分散分析の結果は，次頁の〈表１〉のようになった。この分析の結果から，文章全体のまとまりの強さの判断評定には，少なくとも統括文の位置の差の要因と内容の差の要因が共に効果を与えていることが分かる。

次に，統括文の位置別に同じ位置の４種の文章例を一括した平均値，また，内容別に同じ内容の５種の文章例を一括した文章例の平均値を見ると，次頁の〈表２〉のように

なる。この〈表２〉から，統括文の位置の差の要因の方が，内容の差の要因よりも，文章全体のまとまりの強弱の判断により強く影響を与えていると言えよう。また，統括文の位置の差によるまとまりの強さの評定値の大きさは，「冒頭統括＞末尾統括＞冒頭末尾統括＞零記号統括＞中間統括」の順になることが分かる。統括文が現れている場合の方が，まとまりが強いと判断される傾向があると考えられるが，中間統括の場合の数値の低さにはやや問題が残ろう。これは，中間統括の文章例に問題があったためではないかとも考えられるが，今は保留しておく。

〈表１〉統括文の位置の差と内容の差との分散分析

変動因	SS	df	MS	F
統括文の位置	1455.3	4	363.8	246.9*
内容	35.1	3	11.7	7.9*
交互作用	82.3	12	6.9	4.7*
残差	2033.5	1380	1.5	
		1399		*p<0.01

〈表２〉統括文の位置，および内容の種類別の平均値

統括文の位置	平均値	内容の種類	平均値
冒頭統括	5.0	名前	3.7
末尾統括	4.3	楽器	3.5
中間統括	1.9	あいさつ	3.8
冒頭末尾統括	3.9	趣味	3.9
零記号統括	3.5		

また，d)の文章中の各２文間の結び付きの強さの程度との関連を見るために，統括文の位置別に同じ位置の４種の文章例を一括した，文と文とのまとまりの強さの平均値を示したものが，〈表３〉である。この〈表３〉を見ると，冒頭統括の場合がやや高い値になっている点は，「まとまり調査」での結果と同じであるが，位置別の順位は「まとまり調査」での結果と異なっており，文章中の文と文との結び付きの強さの強弱が文章全体のまとまりの強さに直接反映するとは考えがたいと言えよう。

〈表３〉「結び付き調査」での統括文の位置別の平均値

統括文の位置	平均値
冒頭統括	4.0
末尾統括	3.5
中間統括	3.7
冒頭末尾統括	3.7
零記号統括	3.3

４．おわりに

以上，本稿では，文章の「統括」というものを「文間相互の関係付けの強さ」という側面に注目した調査の結果に基づいて検討してきた。ここで，明らかになったことを列

挙すると次のようになる。

(1)統括文と他の文(被統括文)とを「文と文との結び付きの強さ」の点から比較すると，統括文は特異な結び付きの強さを示しており，意味上形態上の特異性に加え，結び付きの強さの点からも，被統括文に対する統括文の優位性を支持できる。

(2)「文と文との結び付きの強さ」から得られる結び付きから，意味上の非線条的な構造，また，その結び付きの相対的な強さを推測することができる。

(3)文章の末尾に統括文が置かれた場合，冒頭に置かれた場合に比べ，その統括機能が弱まる場合があることを指摘した。

(4)文章全体のまとまりの強さの判断には，少なくとも，統括文の位置の差の要因および内容の差の要因が共に影響するが，統括文の位置の差の要因の方がより強く影響を与えているようである。

(5)統括文の位置の違いによる文章全体のまとまりの強さの順序について，

冒頭統括＞末尾統括＞冒頭末尾統括＞零記号統括＞中間統括

という結果を得た。(ただし，中間統括については問題が残る。)

以上の結果は，文章中の文間相互の関係付けの強さという観点が，文章の研究のための，一つの有効な観点となりうることを示していると考えられる。しかし，本稿での考察には，様々な問題点も残っている。途中で触れたように，「弱い」統括と呼んだものをどのように位置づけるか，あるいは，同じ「統括」という概念で括られるものでも，例えば，主題の提示に基づくものか，あるいは，文章展開の枠付けに基づくものか，さらには，時間・場面の設定に基づくものかなどを区別していく必要はないかなどであり，これらは今後の課題とする。

付記…本稿の下書きに目を通され，有益な御助言をくださった芳賀純先生にお礼申し上げます。

【 注 】

1) 永野(1986)は，「……統括を担当するのは，文章における特定の段落または文もしくは語句である。」(p.120)と述べている。

2) 「構造」の分析は，一般的に，「要素間相互の関係付け・その関係付けの性質・その関係付けの強さ」の分析と考えられる。

3) de Beaugrande and Dressler(1981:1984)の用語。

4) この調査は2回に分けて行われた。昭和61年5月に筑波大学学群1年生（医科学専攻）計40名(内女子11名)を対象とし，この40名中,21名が「冒頭A･末尾A･時間A･空間A」の各文章例に対して,また,19名が「冒頭B･末尾B･時間B･空間B」の各文章例に対して,評定を行った。昭和61年10月に同じく筑波大学学群2年生(基礎工学専攻)計62名(内女子4名)を対象とし,この62名中,32名が「中間A･冒頭末尾A」の各文章例に対して，また,30名が「中間B･冒頭末尾B」の各文章例に対して,評定を行った。この調査では,上述の文章例以外の例についても調査を行ったが,本稿では触れないので省略する。

5) この図の作成手順は，Levelt(1974 p.57) の“dependency diagram”に倣い,次のように行なった。 I 結び付きの強さの順位が最も高い2文の対を選ぶ。 II その2文の対に含まれる文同士がまだ結ばれていなければ,その文同士を結ぶ。 III 一つだけ順位を低くし,その2文の対を選ぶ。 IV 図が完成するまでIIとIIIを繰り返す。つまり，それぞれの文が他のすべての文と(直接的・間接的に)つながるまで繰り返す。（結び付きの強さの同じ2文の対が,2つ以上ある場合で,どちらか1組の2文の対を優先して結ぶことができない時は,次のようにした。もし,それらの2文の対の結び付きの強さの順位が最も高ければ,それらの2文の対すべてを「実線」で結ぶ。また,もし,その順位が最も高くない場合であれば，該当する2文の対すべてを「点線」で結ぶ。） なお,構造再現図の文間を結ぶ線の横の数値は同一の型となった被調査者の評定値の平均値である。

6) 「強い結び付きの強さ」「やや弱い結び付きの強さ」等の表現は構造再現図の文と文とを結んだ線の横に付した「被験者の評定値の平均値」に基づいている。

7) 結び付きの強さの値は,「冒頭A」の場合，②と③の文間が2.9,②と④の文間が2.5,③と④の文間が2.7。「冒頭B」の場合は,順に2.6，2.3，2.5である。また,これら3組の2文の結び付きの強さをすべて同じ値にした被調査者は，「冒頭A･B」ともに7人ずついた。

8) 「展開型」(「同格型」)の方が「累加型」に比べ結び付きの強さが強いという，ここでの指摘は，今の段階では,あくまでも,ここで用いた構造の文章例の場合についての言及であって,連接関係の類型についての一般化は行っていない。

9) この調査は,昭和63年2月に東京学芸大学学部3･4年生(国語教育専攻)計70名(内女子54名)を対象として行い，1つの文章例に対し,35名ずつの評定値を得た。

【 文 献 】

馬場 俊臣(1986a)「文中の語の相互関連度に対する言語的直観の発達」『計量国語学 15-5』155-167.

馬場 俊臣(1986b)「文章の構造と『文の相互関連度』調査」『表現研究44』 1-10.

de Beaugrande, R. and W. Dressler(1981) Introduction to Text Linguistics. (Longman,London); 池上嘉彦他訳(1984)『テクスト言語学入門』紀伊国屋書店

芳賀 純(1982)「言語的直観の分析」『日本教育心理学会 第24回総会発表論文集』 766-767.

芳賀 純(1988未刊)「言語的直観を測る」林四郎編『応用言語学講座 第4巻』明治書院

市川 孝(1978)『国語教育のための 文章論概説』教育出版

Levelt,W.J.M.(1969) The Scaling of Syntactic Relatedness ; A New Method in Psycholinguistic Research, Psychonomic Science 17, 351-352.

Levelt,W.J.M.(1970) A Scaling Approach to the Study of Syntactic Relations, in Flores d'Arcais,G.B. and W.J.M.Levelt(eds.) Advances in Psycholinguistics. (North-Holland Publishing Co.) 109-121.

Levelt,W.J.M.(1974) Formal Grammars in Linguistics and Psycholinguistics (Vol.Ⅲ).(The Hague:Mouton)

永野 賢(1986)『文章論総説』朝倉書店

永野 賢・市川 孝(1979)『言語事項用語辞典』教育出版

佐久間 まゆみ(1987)「『文段』認定の一基準(Ⅰ)―提題表現の統括―」『文藝言語研究 言語篇』(筑波大学文芸・言語学系) 89-135.

《付録1 「結び付き調査」用紙の一部》

質問1 次の文章例で,その文章の中にふくまれている「文」と「文」との間の「結びつきの強さの程度」を総合的に判断し,その結果を「結びつきが全くない(0点)」から「結びつきが非常に強い(6点)」までの七段階の尺度の「+」の所に○印をつけて示してください。

(文章例)①私には三人の男の子がいる。②長男は洋一という。③次男は泰二という。④三男は芳夫という。

{①私には三人の男の子がいる。
②長男は洋一という。}

全くない ←→ 非常に強い

0 1 2 3 4 5 6

{①私には三人の男の子がいる。
③次男は泰二という。}

0 1 2 3 4 5 6

《付録２　「結び付き調査」に用いた文章例の一部》

・注：()内は，各文章例の略称。①～④は文番号。

● 冒頭統括(冒頭A)

①私には三人の男の子がいる。②長男は洋一という。③次男は泰二という。④三男は芳夫という。

● 末尾統括(末尾A)

①長女はピアノです。②次女はバイオリンです。③三女はフルートです。④これらは，私の三人の娘の得意なものです。

● 中間統括(中間A)

①長女は悦子と言います。②次女は文子と言います。③今，言っているのは，私の子供の名前です。④三女は正子と言います。

● 冒頭末尾統括(冒頭末尾B)

①次の二点を守って下さい。②ここでは，飲食をしないで下さい。③ここでは，大声を出さないで下さい。④この二点を守って下さい。

● 零記号統括・時間的配列方式(時間B)

①1984年のオリンピックはロサンゼルスであった。②1980年のオリンピックはモスクワであった。③1976年のオリンピックはモントリオールであった。④1972年のオリンピックはミュンヘンであった。

● 零記号統括・空間的配列方式(空間B)

①火星の公転周期は約1.9 年だ。②土星の公転周期は約29.5年だ。③天王星の公転周期は約84年だ。④海王星の公転周期は約165 年だ。

《付録３　「まとまり調査」用紙の一部》

質問１　次にあげる左側の文章例を，まず読んで下さい。読み終わったら，それぞれの文章について「文章全体のまとまり方の強さの程度」を総合的に判断し，その結果を(右側の)「まとまりが全くない(0点)」から「まとまりが非常に強い(6点)」までの七段階の尺度の「＋」の所に○印をつけて示してください。

【文章例Ａ】

①ここでは，飲食をしないでください。②ここでは，大声を出さないでください。③ここでは，走らないでください。④ここでは，タバコを吸わないでください。

全くない ←→ 非常に強い

0　1　2　3　4　5　6

【文章例Ｂ】

①握手をしてあいさつする国がある。②片足をあげてあいさつする国がある。③相手の鼻をつまんであいさつする国がある。④世界中にはいろいろなあいさつがある。

0　1　2　3　4　5　6

《付録４　「まとまり調査」に用いた文章例の一部》

● 冒頭統括

私の娘たちの得意な楽器です。長女はピアノです。次女はバイオリンです。三女はフルートです。

● 末尾統括

長女はピアノです。次女はバイオリンです。三女はフルートです。これらは，私の娘たちの得意な楽器です。

● 中間統括

長女はピアノです。次女はバイオリンです。私の娘たちの得意な楽器です。三女はフルートです。

● 冒頭末尾統括

私の娘たちの得意な楽器です。長女はピアノです。次女はバイオリンです。これらは，私の娘たちの得意な楽器です。

● 零記号統括

長女はピアノが得意です。次女はバイオリンが得意です。三女はフルートが得意です。四女はハープが得意です。

The Position of Coherency and the Relatedness between Sentences in a Text

Toshiomi BABA

The purpose of this paper is to analize coherency of a text, from the viewpoint of the degree of relatedness between sentences in a text. Two kinds of inquiries were done, one was concerned with the degree of relatedness between all sentence-pairs in texts, the other was concerned with the degree of coherence of texts.

The conclusions are as follows;

1) A degree of relatedness between a sentence with coherency and a dependent sentence was higher than that of between other sentence-pairs. We consider this fact to prove the predominance of a sentence with coherency.

2) The determination of the degree of coherence of a text was made by both, the factor of the position of a sentence with coherency and the factor of the text's content. The former affected more than the latter.